興福寺大鏡
南都七大寺大鏡第
興福寺大鏡第

南都七大寺大鏡第三集 **興福寺大鏡第一册解説**

皇極天皇の朝、蘇我氏の專横がその極に達すると、天皇の即位四年中大兄皇子は藤原家の祖鎌足等と相計つて蝦夷入鹿父子を誅し、次いで輕皇子を立て、大化の改新を遂げ給ふ。この事成るに先つて鎌足はこの大業成就の爲めに密かに發願して丈六釋迦如來、脇侍菩薩并四天王像等を造る。天下定まつて後は、皇太子中大兄、内臣鎌足の輔佐によつて皇位安らかに孝德齊明相繼いで治世し給ふ。次いで齊明天皇即位七年皇太子稱制、後七年にして即位のことあつて鎌足の功がまづその終を全うすると、翌己巳年病魔はこの老臣の身を襲ふ。時に嫡女鏡女王はその延命を祈るために、その父の心願に成つた彼の尊像を安置する伽藍を造ることを請つたけれども、大臣これを許さず、たゞその再三なるに及んでやうやくこれに從ひ、便ち山城國宇治郡山階に堂を造り、里名に因んで山階寺と言ふ。これ興福寺の濫觴である。

その年十月鎌足薨じ、次いで翌々年天智天皇も崩御、やがて起つた壬申の亂も定まつて天武天皇即位のことがあり、天皇即位元年都が滋賀國大津から再び飛鳥の地に遷ると、山階寺亦從つて高市郡厩坂里に移り、よつて又厩坂寺と稱へられる。和銅三年平城奠都のことがあると、鎌足の子不比等は春日野の勝地、現今のそれを相して、こゝに再び寺を移し、金堂造營のことあつて名けて興福寺と言ふ。

本寺はこの緣起に於て爾後藤原家の氏寺となり、やがてその氏家の奈良朝廷に榮えるまゝに元興、大安、藥師、東大等の勅願寺と相並んで時代に重んぜられ、又北圓堂(養老五年)、東金堂(神龜三年)、五重塔(天平二年)、西金堂(天平六年)、講堂(天平十八年)、やゝ下つては南圓堂(弘仁四年)等の造立次第になつて、伽藍も整備、本寺は平城京の一大寺の觀を呈したのであつた。

その創立に關して以上のやうな重い地位を時代史上に占める本寺は宗敎史上に於ても亦一宗根本の道場として著しい意義を有つ。即、奈良朝に於て有力であつた法相宗は大體前後四回に亘つて將來せられるのであるが、その第一傳とせられる僧道昭によるものは本寺がその本流を承け守つて行くのである。さうしてやがて僧智通、智達、智鳳、智鸞、智雄等の同宗第二第三傳の後、天平七年歸朝の僧玄昉によつてその第四傳が行はれ、元興寺これを承け繼ぐと、こゝに興福、元興は北寺南寺として各法相の二對流を相守り立つ。しかも興福寺はその藤家との因緣による寺家の繁榮とともに法門また盛んなるものがあつた。

本寺は日本佛敎史上になほ一つの注意せらるべき地位を有つてゐるものである。それは本寺に行はれる維摩會に就いてである。興福寺の維摩會は藤原鎌足によつて起されたものであるが、彼の歿後はこれを紹ぎ興す人なく、暫し中絶の姿となつてほゞ三十年を過ぎたが、持統天皇の朝になつて不比等がこれを再興し、毎年十月にその法筵を開いて皇運と佛法との隆盛と天子の聖靈一門の英魂の冥福とを祈る習としたのであつて、以後藤氏の繁榮とともにその事の隆

盛を見た。さうしてこの維摩會は毎年正月に宮中に行はれる御齋會、三月に藥師寺に行はれる最勝會とともに佛敎の年中行事中最も重要なものであつて、僧侶はそれ等の講師を經た後に次第によつて僧綱に列せられることゝなつてゐるのであり、加之その三會の講師中では維摩會のそれが先づ第一に經られるべきもの、從つて謂はゞそれは恰かも僧侶の登龍門であつた爲めに、本寺はそのことによる特殊な地位とその地位による大きな勢力とを佛敎史界に有つてゐたのである。

又藤家の氏寺としての本寺のこの緣起は本寺をしてその氏家と榮枯をともにせしめるのであつて、人は本寺の盛衰に藤氏のそれを鑑る。この故に本寺々門の興隆は天平の代と平安の中世とをその最とするのである。ことに平安中世、それは藤原時代とさへ呼ばれて、歷代の氏の長者が攝關として廟堂にその榮華を極めると、興福寺またその威を海內に振ふのである。さらにそれは藤家が王家とその勢を競ふ政爭の渦中に入り、佛寺所謂僧兵を畜へる時潮に乘ると、藤家の氏神春日と相結び、事を構へては神輿を擁して、或は入洛屢々朝家に嗷訴し、或は勅願の寺東大又延曆の僧と鬪ひ、天下を橫行し人心を脅かす。佛法いつしかその域を去らうとするの觀さへあるのであつた。

平安朝の末、源平覇を爭ひやがて源氏の世となるまゝに、藤家の勢次第に傾けば、興福寺の繁榮また昔日の影を沒し、その回祿の災の度々(元慶二、寛仁元、永承元同四、康平三、寛治二、同三、嘉保三、永元 長、治承四、仁治二、建治三、嘉曆二、應永十八、享祿五、享保二年)に伽藍やうやくその舊觀を失ひつゝ行く。さは言へ本寺がこのやうに前後十數回の炎上の厄に遭つてゐると言ふことは再興も亦屢行はれたと言ふことを示し、この事實は本寺が近世に到るまでほゞ千三百年間不斷の相家の氏寺であつたと言ふことに因るのに外ならないのである。この故にこそ、たとへ正當にも人は今その伽藍の礎石に立ち境內の規模を繞つて、その昔時を憶ひ、その十に九を失ふ有樣に長歎息しやうとも、南都の古伽藍多く次第にその廢滅を逐つて行く間に、朝家の東大寺と相並びつゝ、今もなほ南都隨一の寺門として立ち、法相宗根本の道場として佛敎史上に重要の地位を占めるものである。

第一、第二 金 堂 正面、內部

猿澤池の北、石階を上つて南大門の跡を弔ひ、右に五重塔、東金堂、左に南圓堂を見て進めば、人は芝地一段高い所に數個の礎石を見る。中金堂の跡である。堂は本寺根本の中堂、即和銅三年鏡女王によつて建てられたものであつて、本寺の古記は傳へてその長十二丈四尺廣八丈、東西に廡廊を備へてゐたと言ふ。內に鎌足念持の長三寸の銀釋迦像をその白毫に納めてゐると言ふ本寺濫觴の本尊丈六釋迦並に脇侍菩薩、四天王、十一面觀音菩薩二躰と、上橘夫人がその所天藤原不比等の奉爲めにその忌日養老五年八月三日に造つた彌勒淨土變相像等とを安置してゐたのである。

この本堂は永承元年十二月廿四日燒失、同三年三月二日建立康平三年五月四日燒失、治曆三年二月廿五日建立永長元年九月廿五日燒失、康和五年七月廿五日建立治承四年十二月廿八日燒失、建久五年九月

廿二日建立建治三年七月廿六日焼失、正安二年十二月五日建立嘉暦二年三月十六日焼失、應永六年三月十一日建立享保二年正月四日焼失の興廢の歴史を有つ。現今のものはその本來の地よりはやゝ南に位して文政二年に建立せられた假堂とも呼ばれるべきものである。現今その須彌壇上中央に丈六釋迦如來坐像を安んじ、その左右に阿彌陀、千手觀音、藥王藥上、梵天帝釋天、四天王及吉祥天等諸像を置く。退轉のまゝの諸堂の尊像相會して居るのである。

須彌壇上更に一段の壇を構へて居す本尊釋迦如來像は金堂の本尊、木造丈六の坐像であつて應永年中藤山忍慶の作である。最初の釋迦像は永承の火には取出し得たと言ひ又定朝これを繼ぎ作つたとも傳へる。或は彼の修補にその命を永らへたのであらうか。さうしてこの像は康平に燒け治暦に覺助作り、康和の賴助像、建久の明圓像と相繼いで最後にこの忍慶像となるのである。現今も本寺中樞の尊像、これを造るにその佛體光背臺座よく古式を汲んで整備、これを行るに謹嚴、またその時代彫刻中の代表作たるべきもの、たゞその製作時代の下る爲めかその藝術的感興のやゝ乏しきを憂ひる。

第三　木造阿彌陀如來坐像

全長　一丈四寸八分　台座　高三尺六寸

本尊の西側に阿彌陀如來像を置く。もと本寺講堂の本尊像であつて傳へて建久年中院尊の作と言はれるものと推定せられるものであつて、その堂の享保二年炎上の際火中より救ひ參らせて、やがて本堂に安置せられたものである。講堂は天平十八年正月、不比等の子武智麻呂の女が同じく武智麻呂の子仲麻呂とともに先妣の奉爲めに建立したものであつて、初め阿彌陀三尊、不空羂索觀音等の諸像を安んじてゐたのである。又維摩居士文殊菩薩像を置いて維摩會の本尊とし、本堂に於てその修行を見るのが常であつた。本堂が又呼んで維摩堂と言はれたのはこの故によるのである。

本像は治承炎上の像の後を承けて惟ふに建久年中に成つたものであつて、その造られるのに先つて、その當時の佛師界に二對流を作して居た七條佛所の院尊と三條佛所の明圓との間に互にその作者とならうとする爭のあつた後、院尊によつて造られたそのものであると考へられる。寺記が傳へて院尊の作とするのは故あるのである。同時にその活動をしてゐた康慶運慶快慶定慶等が彫刻界にやゝ革新の風を起した間に在つて院尊はなほ定朝以來の遺風を守るもの、この事實は今本像に明らかであつて、その御顏の表情、胸や手、更にはその光背の有樣にその消息を見る。とは言へそれは定朝よりすれば遙か後、佛師界に多年の習癖を打ち返す意氣の現はれた時であれば、その造形の刀法等に餘程力のある動いた趣が窺はれるものである。衣文の造形や台坐の形式などにことにそれが著しい。あまりに便化した襞の取り具合を寫實に戻し、あまりに上に上にと重ねられた台坐の輕い有樣をよく地に安めようとしてゐる。我々は本像のこの點に於てその當時の活氣のある彫刻界の一面を觀、且つ本像がその間に破綻少なくその功を成し、よく整備したものとなつてゐることを讃美するものである。

第四、第五　木造千手觀世音菩薩立像　正面、頭部

全長　一丈七尺三寸五分

本尊像の東側に千手觀世音菩薩像を置く。像はもと食堂の本尊であつたものである。食堂は和銅三年淡海公の建立と言ふ。堂塔の廢立の事繁い内に本堂も屢その厄に遭ふ。本寺の食堂に最初から千手像が本尊として安んぜられてゐたかは今明らかでない。食堂に千手觀音像を本尊とすることはやゝ異例に屬するが、古記は康平三年五月五日の本寺炎上の後、治暦三年二月二十五日再興供養の時、卌手觀音菩薩像一體を造つて舊の如く食堂に安置し奉る由を語つてゐるから、多分本堂の最初から本佛が本尊となつてゐたのであらう。現今の像は治承炎上の後、恐らくは建久前後に成つたもので寺傳に安阿彌快慶の作と言ふ。

治承の兵火によつて東大興福二大寺の堂塔が殆んど地を拂ひその佛像の多くが灰燼に歸した後、やがて兩寺ともにその第二紀元とも言はれるほどの再興の氣運に接したことは當時の彫刻界に非常に大きな刺激を與へたのであつて、定朝末流の習癖を一轉化しようとしてゐた比較的多く輩出してゐた才能ある佛師達はその希望を果し得る好箇の機會に接したのであつた。兩寺の多くの再興像はすべて彼等の手に委せられたのであり、彼等は能くその業を成し得たのであつて、その事實は我等が兩寺をその後度々の炎上を經た後の今日に於て尋ねて見ても明らかになるのである。この時に彼等の實現したことはそれならばどのやうなことであつたか。彼等の考も亦その時代精神とともに復古と言ふことであつた。即定朝以後收得し得た技巧を身に備へ乍ら、更に遡つて範を奈良朝に求め、そこに彼等の新しい解決を行つて行くのであつた。この故に彼等の最も熟視し研究したのは天平の彫刻であつた。その事實は我々が本寺の諸堂を巡るまゝに次第に現はれて來るのであつて、と言ふより早く今我々の前にある像もさうではないか。丈六卌手十一面立像、見上げれば人の思はいつしか唐招提寺千手觀音像に及ぶ。まづ本像造立の案を立てようとした時の作者自身の思も亦かうであつたのではあるまいか。さうして正しくそれを倣つたのではなからうか。兩像の比較はよくその近似を語るであらう。とは言へ彼は決して摸倣者だけではなかつた。具體的にはこの二像はその材料を異にし、やがてその製作法をも互に他にしてゐるのであつた。またその心とする所は時代がこれを變へた。例へば、作者は夾紵像の衣文の行き交ひの柔らかさ更には眞實の衣文そのまゝの姿を最も好んで木材の上に移さうとしてその鑿を縱橫に驅使したが、これを結果的に言ふと、天平の人々の有たなかつたそのあまりに意の儘に動き過ぎる刀と驅け廻る寫實への意想とは本像の裙の衣文をして招提寺像のものとはよほど特殊なものとしてゐるのである。しかもこの間の消息に就いてはその作者中快慶がその極を行つてゐるのであつて、殆銅像に於て見るものゝやうな輪廓線のみ流暢でその實は固い趣のある皺を作る。その事實はその代表作東大寺の阿彌陀如來立像及僧形八幡像によく窺はれるものであるが、本像も亦その種のもの、しかもその手法が阿彌陀像のそれに通ふ所の多いのはこれが快慶作と傳へられることゝともにたゞ偶然のことであらうか。

第六、第七　木造藥王菩薩立像　正面、背面

全長　一丈一尺九寸五分

第八　木造藥上菩薩立像　正面

全長　一丈一尺九寸五分

本堂の須彌壇上、上述の諸尊像の東西に侍立するのは藥王藥上兩菩薩であつて、目に玉眼を嵌め全身に金薄を押す。もと西金堂の本尊釋迦如來像に侍立したものである。西金堂は天平六年皇后光明子が先妣橘大夫人の往生菩提の奉爲めにその忌日正月十一日を擇んで建てた所のもの、健陀羅國の佛師問答師の作と傳へられる丈六釋迦如來像と脇侍菩薩、梵天帝釋天、四天王、十大弟子、八部衆等諸像を安んじてゐたのであつたが、本寺數度の火に興廢相次ぎ、最後に享保二年五月の大火にその跡を絕つてゐる。今存してゐるこの藥王藥上兩菩薩像は建長再興のもの、各その胎內に銘記のある木板を納めてゐてその製作を明らかにしてゐる。藥王菩薩像のものはその一面には未敷蓮を附してその內に寶篋印陀羅尼經と願文とを入れる。願文に言ふ『西金堂脇士藥王菩薩像　依法師千榮發願勸進力　爲宗有嫡女　七世四恩等　令離苦得樂　所奉造立矣　結緣貴賤衆　自他法界類　願超生死海　速昇菩提岸』『藥王菩薩像　法師宗有願　尼慈氏寂蓮　大中臣姉子　阿波田牛若　阿波田明王　阿波田滿若　阿波田吉祥　阿波田閇若　現世安穩願　後生善所願　安養淨土願　爲所願成就』と。板の他面には山吹鳥文の鏡を嵌め、その上を他の板で蓋ふ。鏡の表面に梵字を、板面の鏡の上方左右に各梵字一字を、鏡の下方には『阿耨多羅三藐三菩提、建仁貳年壬戌八月廿日　春氏敬白』を四行に孰れも墨書する。藥王菩薩像のものもほゞ同樣の形式のものであつて、異る所は願文には『西金堂脇士藥上菩薩像　依法師千榮發願勸進力爲定詮中子　七世四恩等（以下同斷）』と記し、鏡の裏面の文樣は梅花鳥のものであり、鏡の下方には『建仁貳年九月六日　願主大中臣姉子』と認めることである。又藥上菩薩左足の枘には『奉修補繪所大佛師觀實　正應元年戊子八月』同右足のそれには『施主大法師憲有延忍房　大法師憲寬賢願房』と墨書する。

願主春氏、大中臣姉子、法師千榮、宗有、尼寂蓮等に就いては今遽かにこれを明らかにし得ないけれども、この時は治承の大火の後を承けて攝政藤原兼實、基通、良經等が銳意寺家の再興に盡力した時であつて、本像も亦この勢に成つたものに外ならない。時しも彫刻界には運慶快慶定慶湛慶院尊の諸雄相競つて腕を揮ふ時であつて、本像またこの間に成つたもの、人はその一足を輕く安めて立つ御姿、御顔と手との造形の巧みさ、さらには衣文に現はれた多くの曲線の流暢さの中に、一つにはよく古式を汲み乍ら、他にはその刀法の迺えにその新しい解決を求めて行くこの時代の特色を見るものである。足枘の墨書に言ふ正應元年八月の修補は惟ふのにこの年に先つ十一年、建治三年七月廿六日南都に地震があつて、興福寺諸迦藍に災した時の破損に關するものであつて、現今の蓮座台座はその修補によるものか。なほ觀實はこの後同年十月に大佛師善增とともにもとこの堂に置いた定慶作の二王像を修補してゐて、この時の興福寺再興にその功少なからないものであらう。

第九、第一〇　木造梵天帝釋天立像　正面、背面

梵天　全長　五尺五寸
帝釋天　全長　五尺七寸

本堂の本尊像の前左右に安んずる梵天帝釋天像は木造彩色像である。藥王藥上菩薩像と同じく西金堂のものであり、その製作もほゞ同時同樣のものである。敢て擧らふべきほどの美しさはないとは言へその隅々までも行き亘つてゐる造形の注意と、形よりも又彩色よりも寧ろ刀法一つで一塊の木材を顔や手の肉づきや衣の柔らかさに飜案して行く樣とはよく時代を語つてゐるものである。

第一一―一八　木造四天王立像　正面、背面

持國　全長　六尺六寸六分　廣目　全長　六尺八寸四分
增長　全長　六尺三寸一分　多聞　全長　六尺四寸二分

上述の諸像を須彌壇に守る護法四天王像は木造彩色像であつて、建久造立の時金堂壇上に作られたもの、寺記は傳へて定慶作と言ふ。

右掌に寶珠を置き左手に刀を執るは東方持國天王、右手に索を握り左手に戟を持するは西方廣目天王、右手に高く戟、左手に刀を有つは南方增長天王、右手に寶塔を捧げ左手を戟に安めるは北方多聞天王、各軀身を甲冑に固め足下に邪鬼を踏む。一面彩色文樣をもつて蓋はれる。その體軀太く、總じて旨とする所は莊重にある。その莊重はやゝその度を過してその形の總體にも亦部分にも鈍さを生じて居る傾があり、また便化に過ぎるものがあるけれども、その形を整へて行くことの克明な樣や四體の間の形式的統一をよく考へてあることは本像も亦當代の一秀作であるとして許されるべき依據とはならないか。

第一九　金堂鎭壇具　其一

金堂壇土中から鎭壇具を出してゐる。その內今こゝに載せるものは金鍍金の小鉢一箇、銀製の皿九箇及玉四箇である。金鍍金小鉢にはその外部に魚々子地に毛彫で蔓狀寶相花及飛鳥を浮かせてゐる。內部には文樣を見ない。その唐草は纖細なものであつて輕妙な趣を有つ。銀器の內二箇は特にその外面に又魚々子地に蔓狀寶相華を毛彫にする。內面は文樣を有たない。この文樣は前者のものよりは餘程豐麗の趣に勝つたものである。孰れも皆正しく和銅三年本寺金堂最初の鎭壇具である。

第二〇　木造四天王頭部

今四天王像の頭部一箇を遺してゐる。恐らくその冑を着けないで開口忿怒する樣より推して增長天のものではあるまいか。その孰れの堂のものに屬するものであるか今明らかでない。木彫に彩色を施し眼に玉を入れ頭部には金具の冠を着ける。その修練を積んだ刀法によつてそこに現はれる線はすべて曲線、面はすべて曲面、しかもそれ等が運動を極め變化を盡す樣、よく鎌倉時代の彫刻の特色を備へてゐる一作である。

興福寺金堂

興福寺金堂内部

興福寺金堂阿彌陀如來像

興福寺金堂千手觀世音菩薩像 其一

興福寺金堂千手觀世音菩薩像 其一

興福寺金堂千手觀世音菩薩像 其一

興福寺金堂千手觀世音菩薩像 其二

興福寺金堂藥王菩薩像　其一

興福寺金堂藥王菩薩像　其二

興福寺金堂藥上菩薩像

興福寺金堂梵天像

興福寺金堂帝釋天像

興福寺金堂四天王持國天像　其一

興福寺金堂四天王持國天像　其二

興福寺金堂四天王廣目天像　其一

興福寺金堂四天王廣目天像 其二

興福寺金堂四天王増長天像 其一

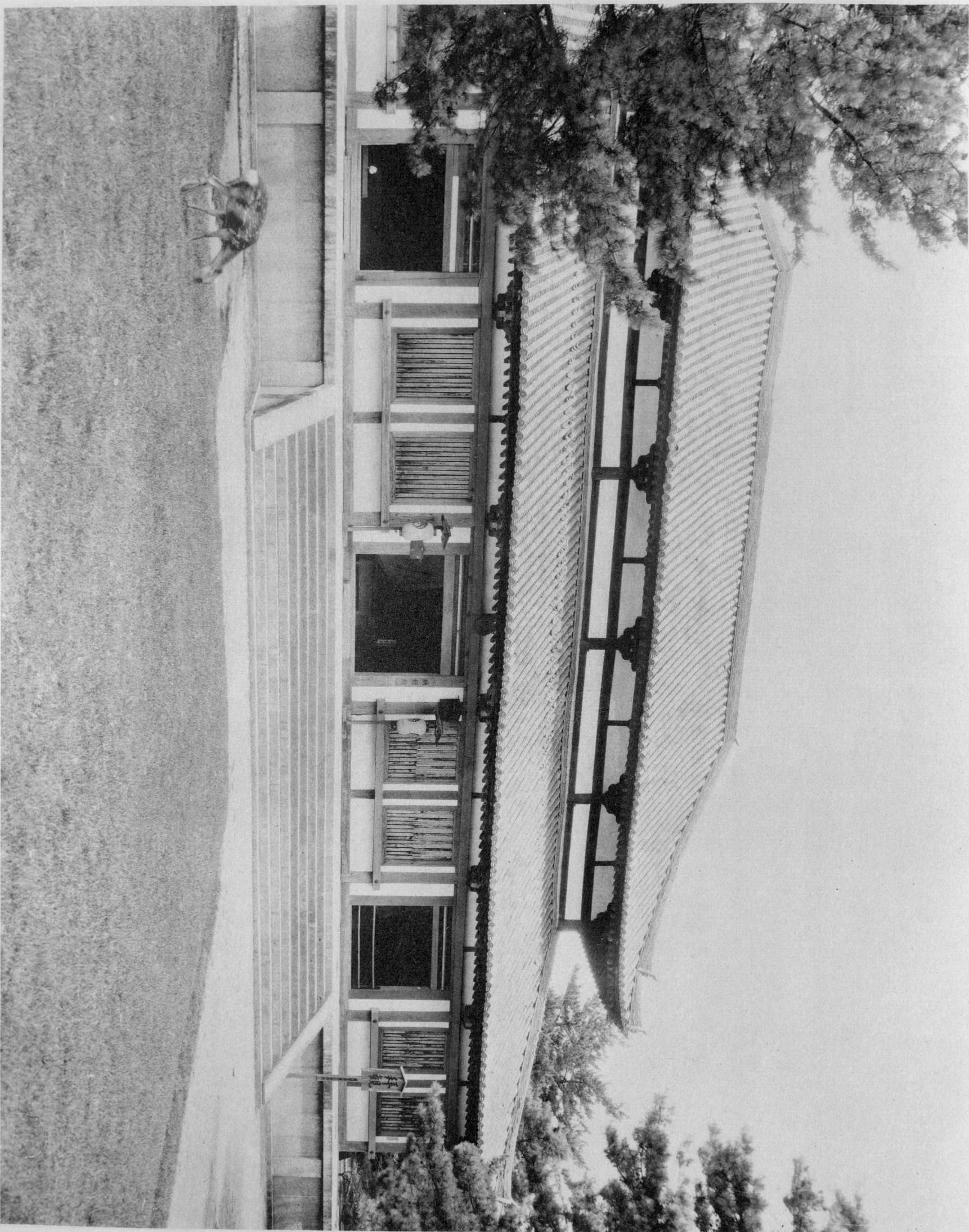
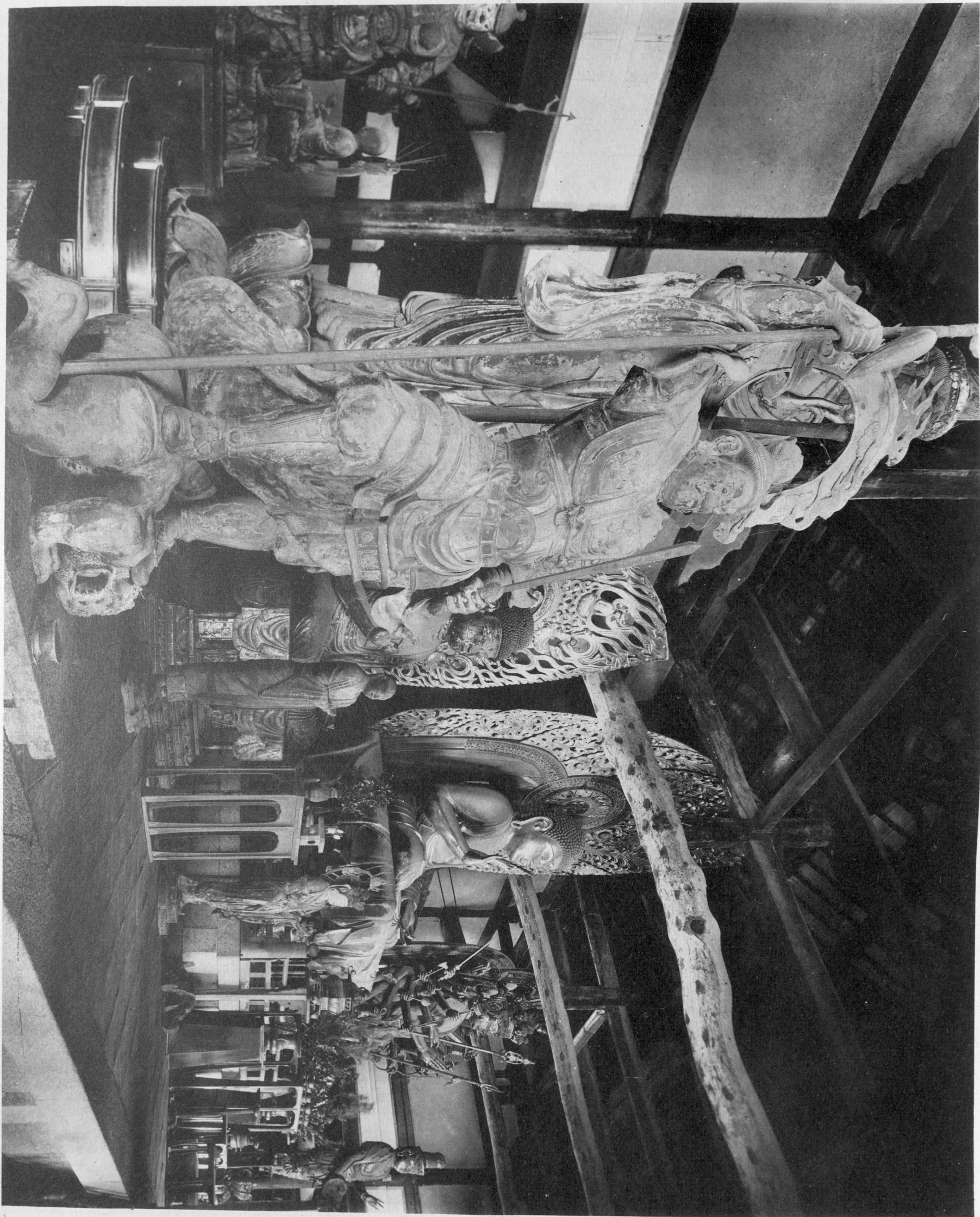
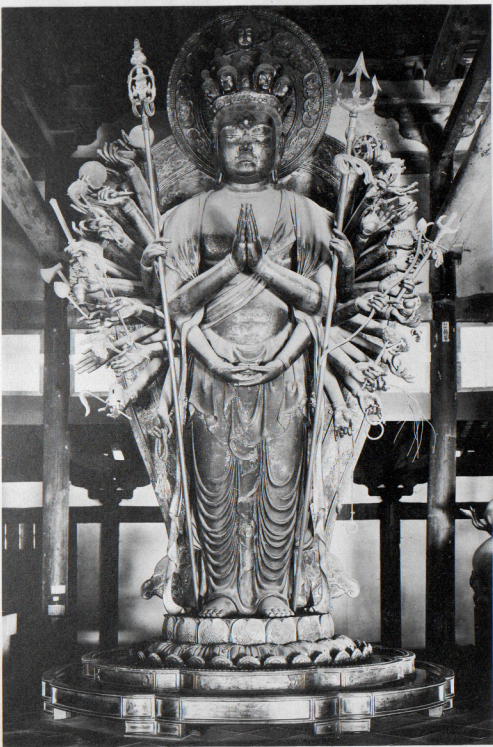
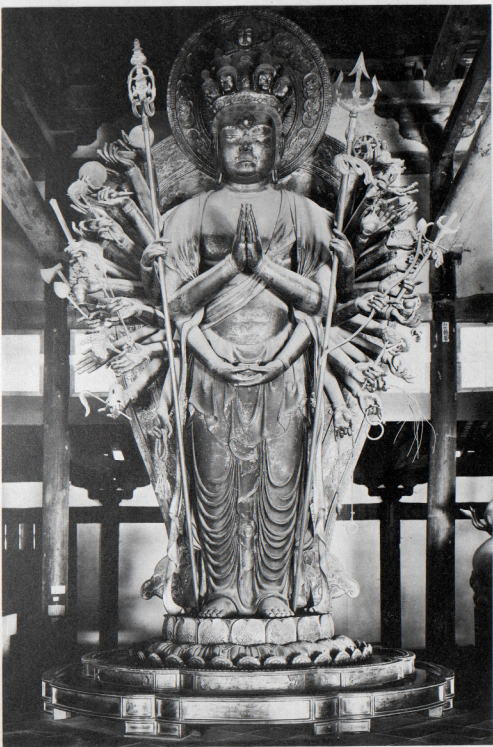
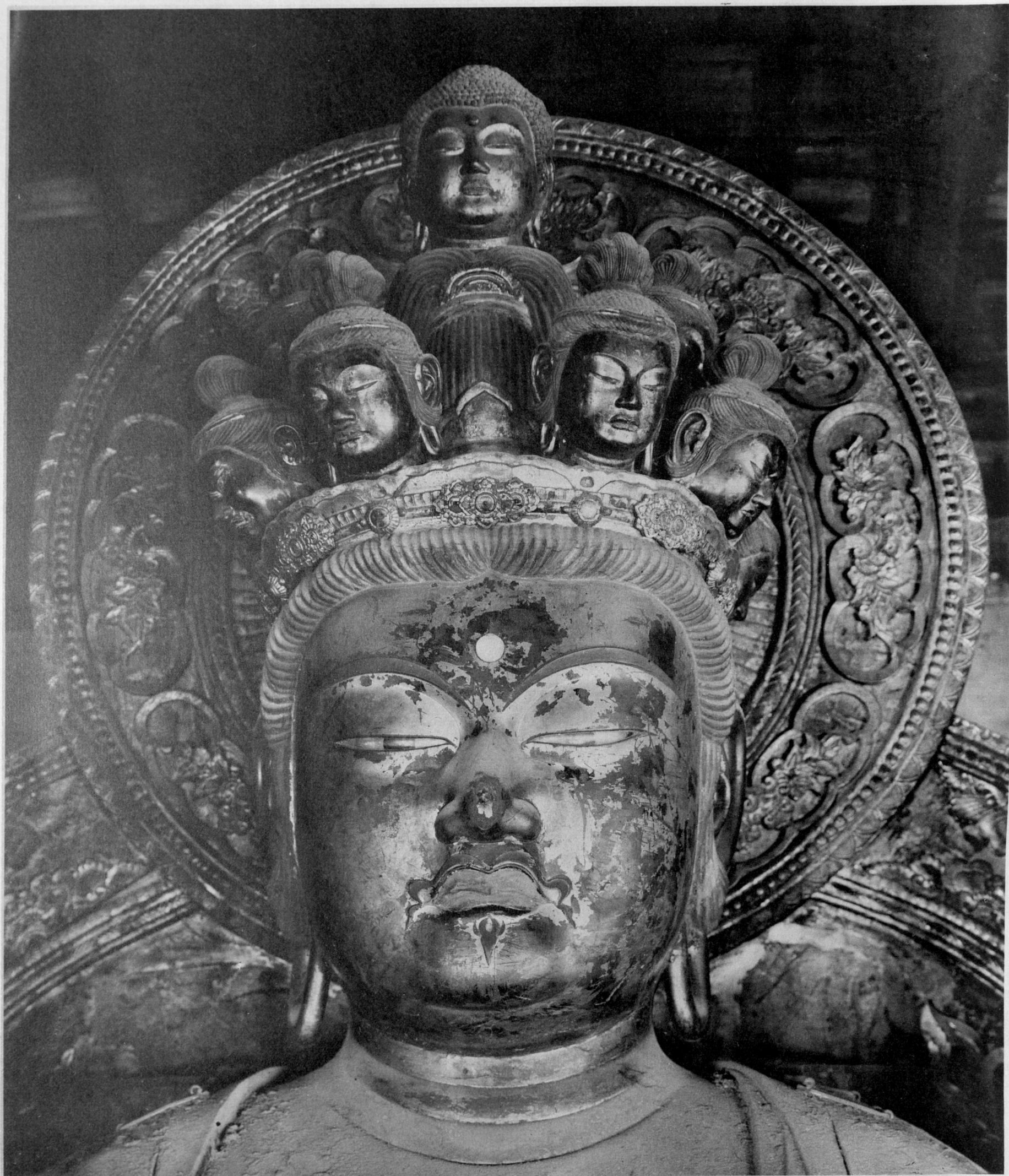
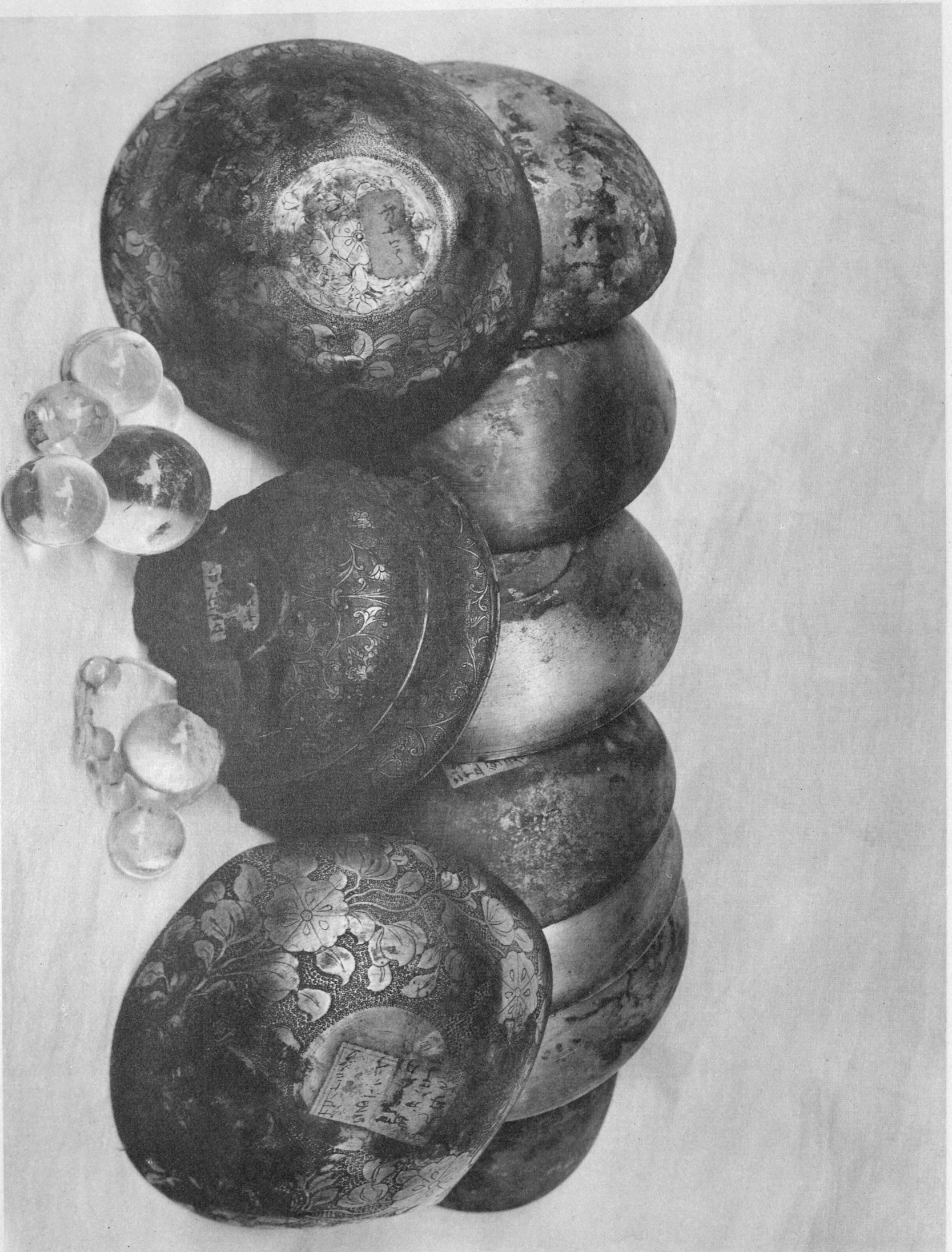
興福寺金堂四天王增長天像　其二

興福寺金堂四天王多聞天像 其一

興福寺金堂四天王多聞天像 其二

興福寺金堂鎭壇具 其一

興福寺四天王像頭部

KITAZAWA BOOK-STORE
東京 神田
北澤書店

昭和四年六月二十五日印刷
昭和四年六月二十八日發行

興福寺藏版

東京市下谷區上野公園內
編輯者 東京美術學校
東京市下谷區上根岸町百廿二番地
發行者 南都七大寺大鏡發行所
東京市下谷區上根岸町百廿二番地
代表者 白石村治
市外下戸塚荒井山五三二
印刷所 精々社印刷部
市外下戸塚荒井山五三二
印刷者 關原勝三郎
京都市上京區丸太町通西洞院
寫眞師 谷山均